人類社会の進化史的基盤研究(1)（2008 年度第 4 回研究会）
日時：2008年10月4日（土）　午後１時00分〜6時30分
場所：ＡＡ研小会議室（302）
内容：
１．床呂郁哉（AA 研所員）「集団形成と暴力-スール一海域世界における事例を中心に」
２．北村光二（AA研共同研究員、岡山大学）「『集団』現象の進化史的理解」

集団形成と暴力－スール一海域世界における事例を中心に

床呂郁哉（ＡＡ研）

■今村社会哲学における暴力の根源性
「力と暴力､闘争と戦争といった文化現象は社会科学と社会哲学にとって避けて通ることのできない根源的諸問題だといわねばならない。なぜなら、それらの現象は社会形成と社会体の運動や歴史の基礎にあるものであり、単なる逸脱的病理現象ではないからである。」
（今村仁司［1982］p. 1）

■チンパンジーにおける暴力と＜戦争文化複合＞
「チンパンジーの恒常的な子殺しが､＜戦争＞とも呼べるような集団間での激しい敵対関係が見られるゴンベとマハレからのみ報告されていることは､これらがカルチャーである証拠になるだけでなく、これら二つの暴力の連関という問題を浮かび上がらせる。言明こそしていないが、伊谷の推測のなかでは明らかに、子殺しの結果できる強力な同盟や父権的社会は、集団間の敵対関係と結びつけられている。つまり、これらの暴力は絡み合った文化現象ということである。私たちはこれを＜戦争文化複合＞と呼ぼう」黒田末寿［1999］p. 75

■ホッブス的人間観 vs. ルソー的人間観
「＜社会状態のそとでは、つねに各人対各人の戦争が存在する＞・・人びとは、すべての人を威圧しておく共通の力をもたずに生活しているあいだは､かれらは戦争とよばれる状態にあるのであり、そして、かかる戦争は、各人の各人にたいする戦争である。」
ホッブス[1968]『リヴァイアサン』
「人間は本来の性質から平和を好み、臆病であり、ほんのわずかの危険に出会った場合でも、最初の反応は逃げ出すことだ」ルソー『人間不平等起源論』

■ルソー的人間観の系譜としてのレヴィ＝ストロース
「レヴィ＝ストロースにとっては､未開社会はたまたま戦争をおこなうが一般的には平和愛好的な社会であることになる。冷たい社会とは非暴力的な社会なのである。（中略）現代の輝けるルソー主義者は、ルソー的な『高貴なる未開人』のイメージを『平和的』未開社会と重ねあわせるが､このイデオロギーは未開社会のみならず社会存在一般における暴力と闘争の現実性やそれを解毒するメカニズムへの注目を宙に浮かせてしまいはしないだろうか。」(今村仁司［1982］p. 34)

■今村社会哲学における「平和」

「暴力や闘争は、元々、「熱い」ものであり、またそれなりに「累積的」性格をもつ。未開社会もまた、暴力と闘争を内在させているかぎり、「熱い」・「累積的」社会なのである。それがなぜ全体として「冷たい社会」とよばれるのだろうか。暴力論の視座から考察すれば、未開社会は暴力とその累積効果を別の方向にそらすメカニズムをもつ、というこの点に「冷たい社会」という結果をもたらす原因がある。一言でいえば、現実的暴力（これは自然史的必然性であって人間の業で除去することは永久に不可能である）を儀礼的・象徴的暴力に転化させるメカニズム、あるいは現実的な社会内権力を国家権力へと上昇させる道程を切断するメカニズム、ここに総じて未開社会がステーショナリーにみえたり、反復的にみえたりする根拠がある。なるほど未開社会は平和的な社会である。だがその平和性は、未開人が高貴であるとか平和愛好的人種だとかいう性格学的原因によるのではなく、社会的人間にはさけることもなくすこともできない暴力と闘争あるいは戦争を、殺害的意味作用から象徴的・儀礼的意味作用の方向に転換させるという本質的に平和作成のオルガノンを事実上つくりあげていることにこそある。これに反してレヴィ＝ストロースの言う「熱い社会」（エジプト、中国、ヨーロッパ、その他）は、右にみたごとき平和形成メカニズムをつくることに失敗した社会のことである。」（今村仁司［1982］p.35）

■行為の継続による境界の産出＝自己の創出（オートポイエーシス）

「あらかじめ設定された自己が自分の境界を変動させながら調整しているのではなく、作動の継続のなかで自己そのものがそのつど形成されていかなければならない。その意味でシステムの境界形成は、同時に「自己制作」なのである。」「行為の継続が内部も外部もないというかたちで作動するとき、みずからの行為の継続によって初めて、自己の境界が形成される。（略）このとき継続的に行為しつづけることが、すなわち自己の境界を区分することであり、ここに機構としては循環的な規定が入る。」（河本[2000] pp.90-91.）

■チンパンジーは復讐するか？

「飼育下で霊長類集団を調べたドゥ・バールによれば、『目には目を、歯には歯を』というマイナスの互酬性は、マカックなどサルには欠けているが、チンパンジーには認められるという。野生では、系統的な証拠ではないが、すでに述べたようにチンパンジーで数件の集団リンチ事件が記録されており、復讐という要素が攻撃の原因であった可能性が高い」（西田[1999]p.162.）

■　スールーにおける海賊と報復闘争関連の暴力事件の事例集（床呂のフィールドノートに基づく要約）

事例１：タウスグのムンドゥがサマ・デア漁師の舟を襲った事例

被害者はパラという名のラミヌサ生まれのサマ・デアの漁師。1989 年頃、仲間と五人でアウトリガーバンカに乗ってホロ島の近くで漁をしていたときに海賊に襲われた。海賊は三名でスピードボート一艘に乗り、全員がタウスグだった。一人はM14、ひとりはM16そしてもうひとりは船首に備えた重機関銃を操作していた。海賊らのボートは４０馬力のエンジンを二基装備していた。全員が軍隊のような制服を着ていたので兵隊かあるいは「アクティビスト」（MNLF などの反政府武装組織を指す）関係者による海賊事件だと思っている。そして海賊はパラの舟のアウトリガーを銃撃しパラの舟を動けなくした。そしてその海賊らに食料とエンジンを奪われた。（93 年 12 月 22 日パラ談）

事例２：タウスグを装ったサマ・デア（ウビアン人）がサマ・ディラウト漁師の舟を襲った事例

2000 年 7 月ころ、サベン夫婦、ギッダ夫婦、サベンの娘二人（いずれもサマ・ディラウト）の義理夫婦の計４隻８人でシタンカイ沖の海上村トントン近くの漁場で anu（夜の突きん棒漁）していたときに海賊に襲われた。襲ってきたのは一隻の舟に乗った目だし帽をかぶった三人組で、タウスグ語を話していた。しかし言葉にサマ語の訛りがあったらしく、どうやらトントンのサマ・ウビアン人の犯行らしい。サベンも銃を頭に突きつけられあやうく殺されかけた。そしてテンペル（漁船）のエンジン二基や銛､水までも奪われた。警察にも報告したが犯人は捕まっていない。(2000 年 9 月 10 日、サベン夫婦談)

事例３：「便乗型」海賊：座礁した外国貨物船に対する掠奪の事例

シタンカイ沖の漁場で航行中のインドネシア船籍の貨物船（ベニアが主な荷）が座礁（93 年 10 月)。シタンカイ沖の海上村に住むサマ・デア（ウビアン）が軍の制服を着用し軍人を装って乗船し、銃を突きつけて乗員（インドネシア人）を救命ボートに乗せて舟から追い出し、荷の一部を掠奪した。その後、残された荷を多くの漁民らも便乗し無人になった貨物船に五月雨式に乗船してベニア板を掠奪していった。貨物船は火事になりその後、回収・曳航。乗員はマレーシア側で救助された。その後、シタンカイで普段なら一枚 140 ペソ前後のベニアが半値以下で大量に流通する状況が数週間続いた。

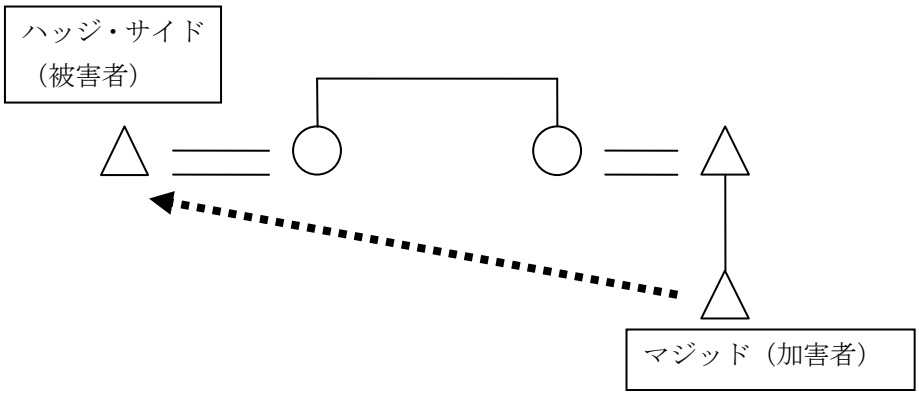
事例４：スールーから東カリマンタン沖の島への海賊遠征（沿岸襲撃）の事例

1993 年、コマンダー・モロイ（ウビアンのサマ・デア）という悪名高い海賊の一味がインドネシア東カリマンタン沖のＭ島を襲撃し現地のＭ島で警察と銃撃戦となった。警察側は 500 発以上の銃弾を撃ち尽くすような激戦だったという。海賊は５人で全員が M16 で武装していた。警官は通常なら四名いたはずだがこの時には一人は休暇で島を出ており三人の警官しか島にいなかった。海賊は島の中央と反対側の集落の二カ所を襲い全部で五軒の家に上がってゴールドの装飾品などめぼしいものを奪った。村はパニックになり人々は森に逃げた。最初に駆けつけた警官が一名が応戦しいったん海賊は逃げて島の中央部の村へ行った。そこにも一名の警官がいたが彼は多勢に無勢で逃げた。その村の家の一軒に海賊は侵入したところ家にいた男が包丁で抵抗しようとして海賊に射殺された。 この後、モロイたちは 50 馬力のエンジンを四つつけたスピードボートで逃走し警察も追いつけなかった。この襲撃事件のあと、島には警察に加えてアスカルも駐屯するようになった。(1994 年 6 月 14 日Ｍ島で現地住人（サマ交易商）から聞き書き)

事例５：姻戚間での海賊行為の事例

被害者：ハッジ・サイド（仮名)。シタンカイ在住のサマ・ディラウトで交易商。密輸によって比較的、裕福であった。加害者：マジッド（仮名)。シタンカイ沖の海上村Ｈに居住するタウスグの若者。父はこの海上村のリーダーと見なされている男イスマイル（仮名)。事件の概要：ハッジ・サイドがシタンカイからセンポルナに密輸に向かっている途上の国境手前の海上（フィリピン領内）でマジッドに待ち伏せされ追跡されたが、すんでのところで逃げ切った。追う側も追われる側もスピードボートに乗っていた。背景：ハッジ・サイドの交易のプランの詳細をマジッドは知っていて狙った。というのもハッジ・サイドの妻とイスマイルの妻は姉妹（サマ・ディラ

ウト）同士だった。マジッドから見ればハッジ・サイドは姻戚（makapikit）となる（下図参照）。（1993 年 4 月 12 日発生。16 日にハッジ・サイドの家族より聞き書き）



事例 6：アブサヤフによるシパダン島襲撃事件

2000 年 4 月にマレーシア領内シパダン島で発生した身代金目当ての人質誘拐事件。スールー諸島ホロ島からスピードボートに分乗してきたタウスグの武装集団によって外国人観光客ら 21 名が誘拐され、ホロの山中に拉致された。その後、人質はリビアの仲介によって無事に解放された。この際、巨額の身代金が支払われたという説が有力である。「アブサヤフ集団（ASG: Abu Sayyaf Group)」のしわざとされ、この事件は通常はイスラーム分離主義武装組織による政治的暴力やテロリズムの文脈で語られる。しかし実際の行動様式はスールーのムンドゥ、サルスと連続性が高く ASG はこの後もサバやパラワンなど各地で同様の身代金目的の誘拐事件を実行。最盛期の ASG は 1000 人規模の勢力を誇ったが、その後は米軍の支援によるフィリピン国軍による掃討作戦と分裂（仲間割れ）などで現在 300 人前後まで勢力低下しているとされる。

余談エピソード：「人柱のための誘拐」スールーの海賊に関する都市伝説

第二次大戦中までスールーでは港や建物を造る際に密かに人柱が使用されていると信じられた。海賊は人を誘拐するが、その際にボルネオの Dayak（「首狩り族」）を連れてきて住人の首を狩っているという都市伝説が一部で信じられている。「イスラームの断食月によく人が狙われた。というのは断食中は夜間に出歩く者が多く、人柱に使用する首は目が覚めているときに斬った首でないと効力は無いからだ。ダヤは斬った首を喋らせることができる能力をもつ。首に問いかけ『私は眠っていたときに斬られた』とその首が答えた場合は使用しなかった」。1992 年にシタンカイで子供が誘拐された際も「人柱目的に誘拐された」という噂が現地で流れた。実際の誘拐はたいてい身代金目的か結婚のために実施される。

事例 7：（元）海賊のライフヒストリー

名前:　ウスマン（仮名）。年齢: 60 歳台後半から 70 歳(1993 年時点。推定）；「引退」した元海賊。出生地：Balimbing, Tawi Tawi 州。エスニシティ：サマ・デア（ Sama Balimbing)
現在の居住地: ボンガオ。概要：1950 年代から約 20 年間のあいだ彼はインドネシア（セレベス）との海上交易商やパラワンやミンダナオ付近で漁もする一方で、スールーからサバ、インドネシア領海内で「ムンドゥ」とくに「クルクル」として活動 したとして現地で有名。

事例 8：ホロ島での有力政治家同士の報復闘争（90 年-95 年）

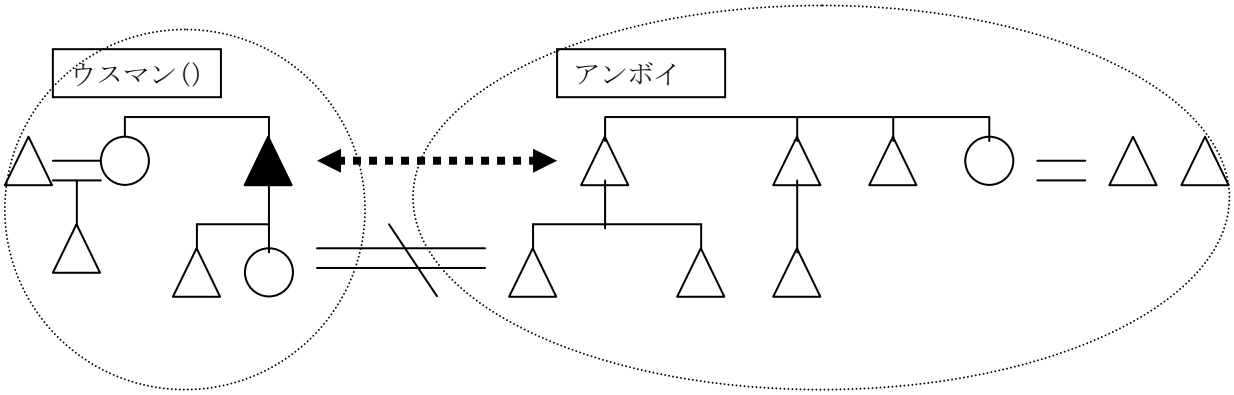
ホロ市のタン市長（Sud Tan）はバータートレードで裕福となり手下も多い有力な政治家。かつてタンの子分（bata）のひとりは凶暴で多くの人を殺したが、その被害者の一人はトラウィ（Tulawi）（元知事）の孫だった。タンは二万ペソの賠償金を支払うとオファーしたが、トラウィ側は拒否し「もしお前（タン）の手で殺人犯を捕らえないならお前らと戦う」とまで宣言した。タンは「しかし発見できないからにはどうしようもない」と言い訳をした。これでトラゥィは激怒し実際に戦闘を仕掛けた。タンは町を基盤に多くの子分をもつがトラウィは山間部に多くの子分を持つ。この両者のあいだの戦闘で 5 年間で計 100 人以上が死亡し、ホロ島では数千人の住人が避難した。戦闘でホロの町の一部も消失した。軍隊はしばらくの間は報復を恐れて介入しなかった。戦争の勃発とピークは 1990 年だが 95 年まで対立関係は続いた。

事例 9：タウスグ同士の海賊事件が集団間の報復闘争に発展した事例

シタンカイ沖の海上村周辺ではよく海賊や報復戦闘がある。1989 年にも海上村サパサパに住む Omar（仮名）というタウスグをナクラとするムンドゥ五名が、やはり別のタウスグの所有する乗客船を襲撃した。このランチャーはセンポルナからシタンカイに向かう途上だった。そして海賊は金品を奪った後に乗員乗客の総計 7 名を殺した。乗客の一人が同じタウスグで犯人の顔見知りであり、口封じのためだった。しかし乗客のうち子供ひとりは死んだフリをして生き残った。その子供の知らせで犯人の身元が知れた。この直後、殺された側のタウスグの遺族の集団が報復のためにサパサパに行き、Ombra の父を射殺した。Ombra 自身や他の仲間はサバなどに逃げ延びた。（92 年 10 月 27 日 にシタンカイにて被害者側の知人談）

事例 10:（元）姻戚間の戦闘（タウスグ間）

トンバンカオのアンボイとウスマン（いずれも仮名）というタウスグの姻戚間で離婚後の復縁をめぐるトラブルが両家族間の殺傷事件に発展。アンボイの息子は元妻（ウスマンの家族）との復縁を求めたが拒否されて両者の家族どうしの銃撃戦となり結果としてウスマンが殺害される。この事件に対して出動した 100 名前後のフィリピン警察軍（PNP）とアンボイの親族側８名との大規模な戦闘でトンバンカオの海上村は全焼する。その後、アンボイはタウィタウィ州知事（当時）に降伏した。知事はアンボイに恩赦を与えアンボイは今もトンバンカオ沖の海上村でアガルアガル養殖に従事している（下図参照）。



事例 11：シムヌル島の村落間戦争（サマ・デア間）

1983 年-86 年：シムヌルでＢ村（仮名）とＩ村（仮名）のあいだで村落間戦争が続いた（ともにサマ・デア）。Ｂ村の MNLF の元ゲリラのもっていた銃を奪うためにＩ村の住民がＩ村を訪問して

いたＢ村の元ゲリラ三名を殺害したことがきっかけ。B 村の MNLF のコマンダーだった A（仮名）が部下とともに報復のためＩ村を襲撃し村人９名を殺害した。これへの再報復としてＩ村は同盟関係にあったM村との連合軍計 100 人以上でＢ村を襲撃した。この襲撃でＢ村では子供１名が手榴弾の破片が当たって殺された。その後、政府軍が介入し停戦となった。A はその後、更なるＩ村からの報復を避けるためマレーシアのサバに逃亡した。

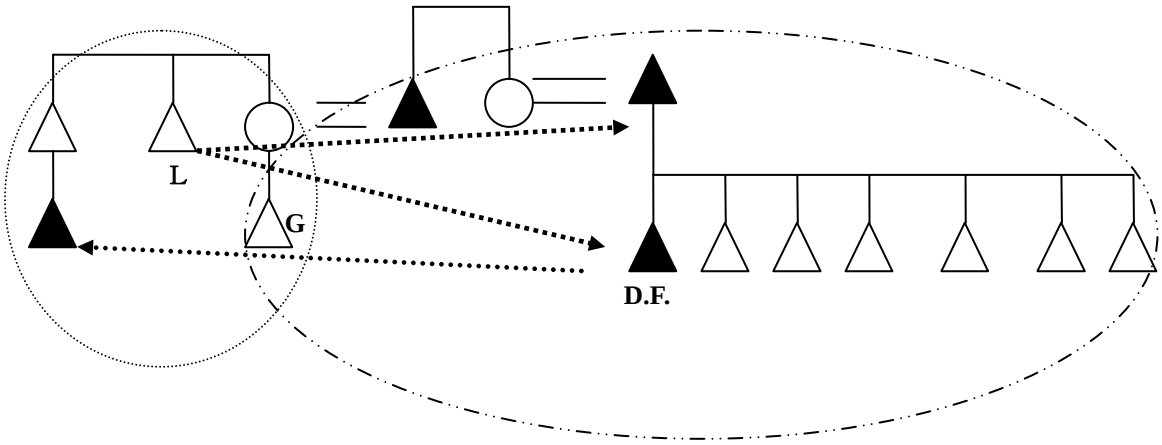
事例 12：結婚をめぐるコンフリクトと戦闘（サマ・デア間。未遂：シムヌル島）

シムヌルのマンスール（仮名）は自分の今の妻とは「誘拐」婚を実施し、妻の家族と戦闘直前までいったが和解した（以下詳細）。マンスールは今の妻とは実は第三イトコ同士だったが相思相愛で結婚を希望した。しかし彼の両親は彼女といま結婚する話を気に入らなかった。これを聞いて妻の両親もマンスールとの結婚に反対した。マンスールは父の所持する 45 口径ピストルを手に取りＢの家にいった。Ｂの両親は家に不在でＢとイトコの女性だけがいた。アッバスはＢの腕をつかんで連れてゆこうとした。「何をする気？」とＢは聞いた。「結婚を許してもらえないなら俺は誘拐による結婚（niguyud）を実行するんだ」とマンスールは答えた。イトコはこれを見てＢの親のいるところに知らせにいった。すぐにＢの父が来て bujak（銛）を構えた。アッバスはこれに対して「近寄ると撃つ」と 45 口径ピストルを構え、そのままＢを連れて逃げた。そしてマンスールの第一従兄弟の男の家に駆け込んだ。そこにマンスールの家族や親戚が集まった。マンスールの家族はＢの家族と戦闘が始まることに備えて武装して集まった。Ｂの側も恥（*kaiyaan*）をかかされたとしてやはり戦闘の準備に入った。そこでＢの母がひとりでマンスールの家に行って交渉の結果、「近いうちに正式に結婚をさせるが、まずはＢを生家に連れてかえる」ということでなんとか話がまとまった。Ｂの母はマンスールの家族からしても親戚だったことと、女がひとりで来たので手荒な真似はできないということで和解を受け入れ、両家族間の武力衝突には発展しなかった。

事例１３：サパサパ市の親戚どうしの報復闘争（サマ・デア間）

93 年の 5 月：サパサパ出身の元 MNLF コマンダーでムンドゥのリーダーとしても知られるダト・ファロック（仮名 DF と略記：サマ・デア）が同市の市長 L（仮名）の親族の雇った殺し屋によって射殺される。そもそもの発端は DF が七年前に女性をめぐるトラブルから L の甥を殺害したことへの報復とされる。DF の父も DF 本人殺害の数年前に L 側によって報復の一環として殺害されている。この事件で床呂のキー・インフォーマントのＧ（仮名）は DF の母方第一イトコであると同時に L の甥でもある。そして L と DF 自身も実は姻戚関係にある。この事件の後、DF の兄弟は当初、Ｌないし兄弟を標的にしていたが警戒が厳しくなかなか機会がなかった。Ｇは両方と親族関係にある難しい立場となった。この事件の当初は G は DF の兄弟と同じ村にいたこともあり DF 側の味方となる。しかしその後、ＧをＬ側の内通者ではないかという疑いを DF の兄弟側に見なされ、身の危険を感じた G はボンガオに逃げた（下図参照：ただし系譜は網羅的にあらず）。

サパサパ市における報復闘争での親族間関係略図（点線矢印：殺害）



参照文献等（抄）

（１）スールー関係

■未公刊資料

(1) British Parliamentary Papers (BPP), House of Commons (London);

1850. Vol. LV (238), 3. Malay Piracy

1852. Vol. XXXI [1538] Borneo Piracy

（２）Public Record Office (PRO: Kew Garden);

Colonial Office;

C.O. 144. Labuan, Original Correspondence, 1844-1906, vols.1-81

C.O. 874. British North Borneo Papers

C.O.1030/1285 (Confidential Correspondence)

Foreign Office;

F.O.71/1-19 Sulu Affairs

F.O.572/4, F.O.572/5,F.O.572/20, F.O.572/23, F.O.572/ 39

■新聞

British North Borneo Herald

Mindanao Herald

Sabah Times

■公刊資料

Barrantes, V. [1878] *Guerras Piraticas de Filipinas contra Mindanaos y Joloanos.*, Madrid: Imprenta de Manuel H. Hernandes.

Blair, E.H., & Robertson, J.A. [1903-1919]. *The Philippines Islands, 1493-1898.* 55 vols. Cleveland: A.H. Clark Co.

Belcher, E.[1848] *Narrative of the Voyage of H.M.S.Samarang during the years 1843-1846.* 2 vols. London: Reeve, Benham & Reeve

Bourne, K. Watt D.C., and Partridge M. (eds.)[1995] *British Documents on Foreign Affairs: Reports and Papers from the Foreign Office Confidential Print,* Part I, Series E., vol 28, University Publications of America

Dalrymple, A. [1808] *Oriental Repertory.* 2 vols. London.1808

Jansen, A.J.F.[1858] "Aanteekeningen omtrent Sollok en de Solloksche Zeeroovers," *Tijdschrift voor Indische Taal-,Land- en Volkenkunde,* 7(1858)

Keppel, H. [1847] *The Expedition to Borneo of H.M.S. Dido for the Suppression of Piracy, with Extracts from the Journals of James Brook, Esq., of Sarawak. 3rd ed.,* 2 vols. London : Chapman & Hall.

Montero y Vidal, J. [1888] *Historia de la Pirateria Malayo Mahometano en Mindanao, Jolo y Borneo,* 2 vols. Madrid: Imprenta de M. Tello.

Mundy, R. [1848] *Narratives of Events in Borneo and Celebes down to the Occupation of Labuan, from the Journals of James Brook, esq., together with a Narratives of the Occupation of H.M.S. Iris by Capt. Rodney Mundy, R.N.* London: John Murray

Raffles, L.S. [1991] *Memoir of the Life and Public Services of Sir Thomas Stanford Raffles with an Introduction by John Bastin,* Oxford University Press.

Rutter, O. [1986] *The Pirates Wind: Tales of the Sea-Robbers of Malaya.* Oxford University Press

Van Hoevell, W. R. [1849] "Laboean, Sarawak, de Noord-oostkust van Borneo en de Sulthan van Soeloe," *Tijdschrift voor Nederlandish Indie.*1849(11)Ⅱ

■民族誌等

Bottignolo, Bruno.[1995] *Celebrations with the Sun: An Overview of Religious Phenomena Among The Badjaos.* Quezon City: Ateneo de Manila University Press

Eklof, S.[2006] *Pirates in Paradise.* Copenhagen: NIAS Press.

Kamilian, J.A. [2007] " Survey of Feuding Families and Clans in Selected Provinces in Mindanao." In *Rido, Clan Feuding and Conflict Management in Mindanao.* Torres Ⅲ W. M.(ed.) Manila: Asia Foundation.

Kiefer, T. [1985] "Folk Islam and the Supernatural". In *The Readings on Islam in Southeast Asia*,eds. IBRAHIM, Ahmad & SIDDIQUE, Sharon et al. pp. 323-325, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies

Kiefer, T. [1986] *The Tausug, Violence and Law in a Philippine Moslem Society.* Illinois: Waveland Press.

Majul, C. [1973] *Muslims in the Philippines,* Quezon City: University of the Philippines Press

Nimmo, H. A.[1972]*The Sea People of Sulu,* San Francisco: Chandler Press

Nimmo [1996] *The Bajau of the Philippines*, New Heaven: Human Relations Area files, Inc.

Saleeby, N. [1963] *The History of Sulu.* Manila: Filipiniana Book Guild
Sather, C. [1997] *The Bajau Laut.* New York; Kuala Lumpur: Oxford University Press.
Tarling, N. [1971] *Britain, the Brookes and Brunei,* Oxford University Press
Tokoro, I.[2003]"Transformation of Shamanic Rituals among the Sama of Tabawan Island, Sulu Archipelago," In *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives.* S. Yamashita and J.S.Eades(eds.) pp.165-178, Berghahn Books(New York, Oxford).
Tokoro, I. [2006] "Border Crossing and Politics of Religion in Sulu." In *Militant Islam in Southeast Asia (Asian Cultural Studies 15: Special Issue)*, pp.121-136.
Warren, J.F. [1981] *The Sulu Zone 1768-1898: The Dynamics of External Trade, Slavery and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State,* Singapore University Press
Warren, J.F. [1986] "Who were the Balangingi Samal? Slave Raiding and Ethnogenesis in Nineteen Century Sulu," *Journal of Asian Studies* 37, no.3 (1978):pp.477-490.
床呂郁哉［1996］「越境の民族誌」、山下晋司（編）『岩波講座文化人類学（第七巻）：移動の民族誌』pp.159-186,岩波書店
床呂郁哉[1999]『越境-スールー海域世界から』岩波書店
床呂郁哉[2007]「「海賊鎮圧」から「対テロ戦争」へ－欧米の東南アジア関与における「長い持続」」『軍縮地球市民』第七号、pp.70-75.
門田修[1986]『漂海民－月とナマコと珊瑚礁』河出書房

（２）その他の文献

MacKinnon K.C. & Fuentes A. [2005] "Reassessing Male Aggression and Dominance: The Evidence from Primatology" In *Complexities: Beyond Nature and Nurture.* MacKinnon S. & Silverman S. (eds.), pp.83-105 The University of Chicago Press.
Wrangham R.& Peterson D. [1996] *Demonic Males: Apes and the Origin of Human Violence*, Houghton Mifflin.
アードレイ、ロバート［1973]『アフリカ創世記』(徳田喜三郎他訳）筑摩書房
アードレイ、ロバート［1978]『狩りをするサル』(徳田喜三郎訳）河出書房新社
伊谷純一郎［1991]「カルチャーの概念」西田利貞、伊沢鉱生、加納隆至（編）『サルの文化誌』平凡社、pp.269-277
今村仁司［1982]『暴力のオントロギー』剄草書房
今村仁司［1989]『排除の構造』青土社
今村仁司［2000]『交易する人間』講談社
今村仁司［2005]『抗争する人間』講談社
今村仁司・今村真介［2007]『儀礼のオントロジー』講談社
エヴァンス=プリチャード［1978]『ヌアー族』(向井元子訳）岩波書店
川田順造（編）［2006]『ヒトの全体像を求めて』藤原書店
河本英夫［1995]『オートポイエーシス－第三世代システム』青土社
河本英夫［2000]『オートポイエーシス 2001』新曜社
栗本英世[1999]『未開の戦争、現代の戦争』岩波書店

黒田末寿［1999］『人類進化再考－社会生成の考古学』以文社
佐原真［2005］『戦争の考古学（佐原真の仕事４）』岩波書店
ダイアモンド、ジャレド［1993］『人間はどこまでチンパンジーか？』（長谷川真理子・長谷川寿一訳）新曜社
ダイアモンド、ジャレド［2000］『銃・病原菌・鉄（上下巻）』（倉骨彰訳）草思社
田中雅一（編）［1998］『暴力の文化人類学』京都大学学術出版会
ドゥ・ヴァール、フランス［1993］『仲直り戦術』（西田利貞・榎本知朗訳）どうぶつ社
ドゥ・ヴァール、フランス［2005］『あなたのなかのサル』（藤井留美訳）早川書房
トーマス、E.M.［1982］『ハームレス・ピープルー原始に生きるブッシュマン』（荒井喬・辻井忠夫訳）海鳴社
西井正弘［1998］「国際法における海賊」『平凡社世界大百科事典』平凡社（CD-ROM 版）
西田利貞［1999］『人間性はどこから来たかーサル学からのアプローチ』京都大学学術出版会
ハート、ドナ&サスマン、ロバート［2007］『ヒトは食べられて進化した』（伊藤伸子訳）化学同人
馬場悠男［1999］「ヒトの攻撃性と食人」福井勝義・春成秀爾（編）『戦いの進化と国家の生成』東洋書林。pp.33-56.
ベイトソン、グレゴリー［2000］『精神の生態学』（佐藤良明訳）新思索社
ホッブス［1968］『リヴァイアサン』（水田洋・田中浩訳）河出書房
マトゥラーナ、H.R.＆ヴァレラ、F.J.［1991］『オートポイエーシス』（河本英夫訳）国文社
モンターギュ、アシュレイ［1982］『暴力の起源－人はどこまで攻撃的か』（尾本恵市・福井伸子訳）どうぶつ社
ルソー［1972］『人間不平等起源論』（本田喜代治・平岡昇訳）岩波文庫
ローレンツ、コンラート［1970］『攻撃－悪の自然誌』（全二巻。日高敏隆・久保和彦訳）みすず書房

２．「集団」現象の進化史的理解 - システム／環境 - 関係における２種類の集合的行為

北村光二（岡山大学）

１.「集団」現象とはなにか

①複数の個体が、空間的に近接しながら、安定的に共存してること

②複数の個体が、空間的に近接しながら、同じ活動を一緒に行っていること

③メンバーシップの安定した複数の個体のまとまりが､安定的に共存しつつ活動を同調させている こと

④「もの（＝資源)」との関係づけに関わる人びとの活動において、それぞれの行為が相互に接続するところに秩序を構成して安定的な社会的まとまりを作り出したり､具体的課題への対処において判断を共有することによって、「もの」との関係づけにおける社会的まとまりを作り出したりすること

２.「集団」現象の生物学的基盤

１）ある動物種の１個体が生き続けるためにする周囲の環境との関係づけにおいて、事後に実現すべき結果が明らかであっても､その要求に答える行為が適切な対象を見出すことができるとは限らないし、一方で、事前の条件として与えられた対象との間に適切な関係づけを行おうとしてもそうできるとは限らないという決定不可能性がある

２）その種の生態的ニッチを構成する「もの」のうちの主要な資源の意味やそれを利用する行為には、ある特定の意味に対応してある特定の機能を実現する行為が選択・調整されるように自然選択が働くことによって、この関係づけのプロセスが、その種のすべての個体がいつでもそうできるというレベルで、決定可能なものであるかのように扱われることになる（それでも、周囲の環境との関係づけの多くは決定不可能なものにとどまる）

３）進化のある段階において、周囲の環境との関係づけにおける対象として、同種他個体（＝他者）が、それ以外の「もの」とは区別される特別なものとして分化するという事態（社会システム（＝種社会）の分出）が成立する

４）他者との共存を再現可能な秩序だったものにしようとしても、それぞれが自らの指向するゴールを実現しようとすることで秩序を実現できるとは限らないし、 活動の同調という共存状態を安定的に実現しようとしても、同じ「もの」をめぐって争うことでそうできるとは限らないという決定不可能性がある

５)同じ対象に対する同じ関係づけを行う可能性が高いというレベルで対称的な他者との共存を適切なものにしようとする試みは､そのような課題への対処として同じように考える可能性が高いというより抽象的なレベルで対称的な他者との関係づけの試みにもなるのであり､秩序を作り出そうとして相互調整したり､安定的な共存状態を作り出すことに結びつく具体的判断を共有したりすることで、より容易に、そのプロセスを決定可能なものとして扱えるようになる

６）「もの」との適切な関係づけを行おうとしながら、そのときの他者（同種他個体）との関係づけも適切なものにしようとするときにもたらされる決定不可能性に対して､対処がより容易な他者との関係づけに目を向けて、それぞれの行為を相互に調整したり、問題対処への判断を共有したりすることによって、そのプロセスを決定可能なものとして扱えるようになる

３.「もの」との関係づけにおける２種類の活動

１）「もの」との関係づけに不可欠な２種類の活動

①遂行的活動：対象との関係づけのあり方を指定する対象に識別される意味を用いて、行為を選択・調整することによって現実を変更しようとする活動

②探索的活動：自ら生き続けるうえで不可欠なある特定の機能を実現するために利用可能な対象を、それ以外の不適切なものから区別して特定し、その意味を識別しようとする活動

２）「もの」との関係づけにおける２種類の活動の循環的な決定過程

（いつでも識別可能な「意味カテゴリー」の存在を前提に）その意味が指定する対象との適切な関係づけを可能にする行為を選択・調整する

↑　　↓

具体的対象に意味を体験・識別する　　具体的行為による関係づけによってある価値を実現する

↑　　↓

（いつでも実行可能な「行為カテゴリー」の存在を前提に）その行為に固有の価値を実現するうえで適切な関係づけの対象を探索する

４．対称的な他者との関係づけにおける２種類の活動

１）対称的な他者との共存を可能にする２種類の活動

①敵対的衝突の回避（秩序の生成）：敵対的衝突の可能性が現実的なものとなる状況において、衝突の回避という事後の結果に向けて相互の行為を調整する活動

②注意の共有による活動の同調：共在する他者と注意を共有することによって、同じ対象との同じ関係づけが動機づけられるところで、他者との直接的な関係づけを回避するというやり方を前提にすることで「活動の同調」という共存状態を実現する活動

２）対称的な他者との関係づけにおける決定不可能性への２種類の対処法

①対称的な立場にあるものとして、同じ対象に対する同じ関係づけが動機づけられるときに、いつでもその対象をめぐる敵対的衝突が現実的なものになることを前提に、一方が排除しようとするところで他方が撤退することで衝突を回避するというやり方を採用することによって、空間的に分離した共存状態を実現する（排他的な縄張りを構える）

②同じ対象に対する同じ関係が動機づけられるときに、いつでも他者との直接的な関係づけを回避するというやり方を採用することによって、活動の同調という共存状態を実現する（魚の群れ）

３）対称的な他者との関係づけの２種類の活動の循環的決定過程

敵対的衝突の可能性が現実的なものとなる共存状態

↑　　↓

①競合関係の顕在化　　①敵対的衝突の回避

②活動の同調　　②接触そのものの回避

↑　　↓

同じ対象に対する同じ関係づけの同所的・同時的な選択が可能になる共存状態

５．対称的な他者との関係づけにおける決定不可能性への対処

１）群居的な生活形を採用した系統

・空間的に近接して共存する者どうしにおいて、それぞれの「もの」との関係づけの活動を空間的に限定することによって、相互の接触を可能な限り排除しようとして「衝突の回避」をより確実なものにし、同時に、「もの」との関係づけの活動の動機づけを共有しようとすることによって、「活動の同調」をより確実なものにする

①社会的抑制：「もの」との関係づけの活動を限定することによって接触を回避しようとする

②社会的促進：活動を同調させるというやり方によって、それぞれの行為者の「もの」との関係づけが可能になっている

２）メンバーシップが定まった群れの成立

・種社会のメンバーの空間分布における分節化に対応する、「仲間／それ以外」という他者分類が利用可能になるところで、行為接続の秩序を構成するというゴール指向性を共有する可能性が高く、同じ活動を一緒にしようとする動機づけを共有する可能性が高いと「仲間」と、その時々の環境との関係づけの行為を接続して秩序を構成すべくそれぞれの行為を限定しつつ、同時に、その時々の環境との関係づけについての判断を共有して行為を集合化したりすることによって、「群れ」というまとまりを再生産できるようになる

３）「群れ」というまとまりの再生産に不可欠な２種類の活動

①「仲間」と相互に行為を接続して秩序を構成すべく環境との関係づけをあるタイプのものに限定する（優劣関係に従属した環境との関係づけの限定）

②「仲間」と一貫して、その時々の環境との関係づけの枠組みを共有し、活動を同調させる（親和関係を手がかりにした環境との関係づけの共有）

４）「群れ」を再生産する２種類の活動の循環的な決定過程

敵対的衝突の可能性が現実的なものとなる共存状態

↑　　↓

活動の同調と競合関係の顕在化　　相互の行為の接続による秩序の形成

↑　　↓

同じ対象に対する同じ関係づけの同所的・同時的な選択が可能になる共存状態

６．「もの」との関係づけにおける人々の活動の集合化

１）他者との関係づけの適正化を手がかりとする「もの」との関係づけの適正化

・個人として環境との関係づけを適正なものとすることと、他者との関係づけを適正化することとを両立させなければならないという課題に直面して、対処がより容易な他者との関係づけという側面に目を向けて、他者との行為接続に秩序を構成することを優先して「もの」との関係づけのあり方を限定しようとしたり、「もの」との関係づけについての判断を共有することによって、他者との関係づけのあり方に関わる「意思決定の統一」や「作用の統一」という状態を実現しようとしたりする

２）仲間との関係づけにおける秩序の生成を優先させるやり方

・相手との優劣関係を手がかりに「もの」との関係づけを選択する

・ある「もの」との関係づけにおいて、その「もの」が相手が所有するものであるという意味を認めることによって、相互に行為が接続されるところに秩序が生成する

・「禁止の規則」が指定する「もの」の意味にもとづいてその「もの」との関係づけの行為を選択することによって、それぞれ行為者の行為が相互に接続されて秩序が生成することになる

３）仲間との関係づけにおける秩序の生成を優先させるやり方の循環的な決定過程

行為の選択・調整による関係づけのプロセスの遂行

（「規制的規則」によって適切な行為を指定する）

↑　　↓

対象の（社会的に共有される）　　諸行為の接続による秩序の生成

意味の体験・識別

↑　　↓

同じ対象との関係づけの諸行為の相互調整を可能にするような対象の

付加的な意味の探索

４）「もの」との関係づけにおける「意思決定の統一」や「作用の統一」を実現しようとするやり方

・それぞれが１頭だけでできる活動をわざわざ他者と一緒にしようとする

・直面する事態への対処として、問題対処のプランを共有して、個人的対処では解決できない問題に仲間と共同で対処しようとしながら、それがそれぞれの判断の「一致」によるものであることをその場に明示することによって、その対応が正当化される

・それぞれの行為者が自らの意志で、「儀礼の規則」が指定するやり方で直面する問題に対処しようしつつ、それを共同で行うことによって、その対処は正当化される

５）もの」との関係づけにおける「意思決定の統一」や「作用の統一」を実現しようとするやり方の循環的な決定過程

活動の統一にもとづく対象との関係づけの正当化

↑　　↓

活動の統一に向けた判断の共有　　行為によって（社会的に共有された）価値を実現する

↑　　↓

その行為に固有の価値を実現するうえで適切な関係づけの対象の探索

（「構成的規則」によってその価値を実現するうえでその行為が満たすべき条件を指定する）

７．人間社会における「集団」現象 - 区別されるべき２種類のもの

１）仲間との関係づけにおける秩序の生成（社会システムの再生産）に比重を置いたやり方

・「もの＝資源」や外部社会との関係づけのあり方は、秩序を作り出すための仲間との相互調整を通して限定されてしまうものに委ねるというやり方

・それは、具体的課題への対処において、社会システム内の秩序を作り出すという「行為の後にもたらされる諸結果」に照準を合わせたやり方であるとともに、そのような機会をとらえて、その外部環境とは一線を画するもとしてある社会システムをその場に確認しようとする試みになる

２）「もの」との関係づけにおける「意思決定の統一」や「作用の統一」（統一体としての社会システム）を実現することに比重を置いたやり方

・環境（「もの」や外部社会）との関係のあり方を社会システムとして一貫したものにすること

に比重を置いて、その関係づけの枠組みを仲間と共有して行為を集合化することによって、その選択に正当性を打ち立てようとするやり方
それは、具体的課題への対処において、環境との関係のあり方を適切なものにするという 「行為に先だって確保されるべき諸条件」に照準を合わせたやり方であるが、そのような機会をとらえて、行為の集合化を確実なものとするより上位のレベルでの判断基準の共有が模索される。